3

「……く。わからん」

ぶ厚い医学書を不倶戴天の敵の如くにらみつけながら、コナンは小さく唸った。

ロンドン大学、図書室。与えられた課題を解き明かそうと駆け込んで、早二時間が経過した。占領した机の上では専門書の塔が倒壊しそうだが、いまだ「わからない」以外の結論は出ていない。もはや何がわからないのかわからないという、慨嘆すべき状況と言えた。

「ひょっとして、資料の方が間違っているのか？　ええと、このケースは、チャーリング・クロス病院？　聞いたことがあるような、ないような……」

「ーー『先祖返りと疾病』？　進化論系の論文か？　革命からぼちぼち百年だが、いまだにその手のは流行ってるんだな」

「そりゃあ、旧来の価値観を見直す革新的な視点は、あらゆる学問のーーって、アーサー!?　なんでここに！？」

思わず大声を出したあと、コナンは慌てて口をつぐむ。離れた机にいた学生が一瞬こちらに咎めるような視線を向けたが、すぐにまた元に戻った。コナンは息を吐き、改めて同居人に向き合った。

「こんなところで、何をしてるんだ？」

「もちろん、昨日の件さ。調べ物があってね」

「調べ物？　医学部でか？」

尋ねると、「医学は関係ない」とアーサーは、手にしていた何冊かの本の中から、特にぶ厚い一冊を机に置いた。

「……『イギリスの紋章』？」

「革命以前の、旧イギリス貴族の紋章に関する文献だ。……見たまえ。これだ」

「……犬？　猟犬（ハウンド）、か？」

アーサーが本を開き、中に記された紋章のひとつを指さした。

獰猛な猟犬の横顔を模した紋章だ。

「これがどうかしたのか？」

「鈍いな。ステイプルトン邸のステンドグラスを思い出せ。玄関ホールにあったやつだ。ついでに言えば、暖炉の前飾り（マントルピース）にもこいつがいたぞ」

そう言って、アーサーは真剣な眼差しを向けた。

「バスカヴィル。この猟犬の紋章は、旧イギリス貴族バスカヴィル家の紋章だ」

コナンは、へえ、と文献にある紋章を見直す。確かに、ステイプルトン家のステンドグラスは、この紋章を模したデザインだった気がする。
「そうなのか。でも、あの屋敷は、元は貴族の屋敷だろう。別におかしくはない」
「普通に考えればな。だが、昨日見た、あの黒いトレイ。あれはやはり、ニッポンの漆器だ」
「ニッポン？　待て待て、アーサー。話が見えないぞ」
訳がわからないコナンに、アーサーは「良いだろう」とニヤリと笑った。
「実はここに来る前に、マリーのツテを頼って、新聞社の記録からも裏を取った。まずはバスカヴィル家の近代史だ。
バスカヴィル家は他の旧イギリス貴族同様、百年前の革命のあと新大陸――神聖ブリタニア帝国に亡命した。ただ、イギリスとの繋がりは残したらしく、亡命後も頻繁に連絡を取っていたようだ。
また、その関係からか貿易商として、かなりの財を成しているが、一方で、貴族としては目立った功績は見当たらない。ただひとつだけーーとあることで、いまも名前が残っている」
と、アーサーがもう一冊、持っていた本を机に置く。
「今度はなんだ？　『ニッポン見聞記』？」
「神聖ブリタニア帝国で発行された書籍だ。ニッポン開国時の様子を、当時の使節団の一人が書き記している」
「ニッポンの？　しかし、『開国』っていうのは？」
「銀助から聞いたことはないか？　当時ニッポンは二百年以上もの間、他国との通商、交易を厳しく制限していた。いわゆる鎖国状態だったわけだが、革命暦六四年、皇歴で言う一八五三年、ブリタニアの船がニッポンを訪れたことをきっかけに、半ば強引に他国との国交が始まっている。このときの事を、かの地では『開国』と呼んでいるんだ」
「なるほど。それで？」
「著者名を見てみろ」
「んーーあっ！　『チャールズ・バスカヴィル』？」
「バスカヴィル家の先代当主だ。おそらく、貿易商としての腕を見込まれて、使節団入りしたんだろう」
自身の推測を口にしたアーサーは、机に置いた本をぺらぺらと捲りながら続ける。
「実際、ニッポン開国後、バスカヴィル家の権勢は明らかに増している。ただ、出る杭は打たれるというべきか、バスカヴィルはこの件以降、ブリタニアの政争に巻き込まれるようになったらしい。
そして、敗北した。

経営していた貿易会社も七〇年代前半には破産している。辛うじて当主が代替わりした記録は残されていたが、その後の記録は途絶えている」
アーサーの台詞に、コナンは、うむむと低い唸り声をもらした。
「……なあ、アーサー？　バスカヴィルとやらの貴族の歴史はわかったが……結局何が言いたいんだ？　昨日の件で調べ物に来たんじゃないのか？」
「またしても鈍いな。政争に敗れ、没落したバスカヴィルは、辛うじて残っていた国外の資産を頼り、名を変えてブリタニアから逃げたんだ。言わば、再亡命ーー出戻りと言ってもいいかな」
「再亡命？　名前を変えてって……」
「そう。『ステイプルトン』と」
そのひと言に、コナンは「なっ！？」と両目を見開く。
「じゃあ、アーサー。お前、ステイプルトン一家が、元貴族のバスカヴィルだって言うのか？」
「『元』どころか、『現』貴族かもしれないぞ？　イギリス貴族じゃなくて、ブリタニア貴族だが」
唖然と絶句するコナンを余所に、アーサーは、今度は一通の封筒を机に置いた。
「昨日の屋敷の不動産記録だ。革命後しばらくして『ライオンズ・カンパニー』が買い取っているが、これはバスカヴィル家が経営していた貿易会社の子会社だ。祖国は捨てざるを得なかったものの、一族が代々住んでいた屋敷を、他人の手に渡したくなかったんだろうな。この『ライオンズ・カンパニー』は親会社が破産したあとも形だけ残されていたが、運営されてはいなかった。それが、昨年の十二月、ほとんど唯一の資産だったあの屋敷を、突然ステイプルトンに売却している。つまり、名を変えたバスカヴィルは、元々住んでいた屋敷に舞い戻ったんだ」
「……なんということだ」
目を白黒させるコナンに、ホームズは少し得意げに肩を竦めた。
「昨日メイドが持って来た、紅茶セットに使われていた黒いトレイ。あれはニッポンの工芸品で漆器と言う。日本趣味の好事家ならともかく、昨日見たステイプルトン家には似つかわしくない物だった。しかも『紅茶セットのトレイ』として使い込まれていたから、かなり前にニッポンから出た物だ。当て推量になるが、先代当主のチャールズ・バスカヴィルが持ち帰った物かもしれない」
つらつらと述べるアーサーに、コナンは呆れたような感心するような思いで、「なんと……」とつぶやいた。
それから、一度頭を振って、落ち着きを取り戻す。
「……ステイプルトン家の事情は理解できたよ。けど……なあ、アーサー？　君は一体、何が

したいんだ？」
「は？　どういう意味だい」
「アーサー。君への依頼は、ローラの父親を捜すことだろ？　好奇心の赴くままに、隠された秘密を暴くことじゃないはずだ」
これはアーサーの悪癖のひとつだが、彼は自分が気になることを見つけると、他者の目や心情、周囲への影響を無視して、突き進む傾向がある。下宿先での実験や開発など、その最たる物だろう。
コナンとしては、そうしたアーサーの知的活動や傍若無人さをーー渋々ではあるが――同居人として受け容れているつもりだ。だが、依頼人はそうではない。特に幼いローラの気持ちは無視できない。
コナンが指摘するとーー珍しくーーアーサーは我に返ったような表情を見せた。
それから微かに頬を赤らめ、
「そんなことは、わかっているっ。この場合、失踪した父親――現当主、ロジャー・ステイプルトンの正体を知ることが、事件解決への近道だと判断したから調べたに過ぎない」
「そうか。なら、いいんだが」
コナンが言うと、アーサーは見るからに不機嫌そうに口をへの字にした。それには気付かないまま、「しかし……」とコナンは疑問を口にする。
「その、ロジャーってローラの父親は、周りの住人との交流を拒否してるんだよな？　訪れる者もなく、子供にまで家に誰も招くなと指示してる。その上、名前まで偽っているとなると、これは……」
コナンが思いついた懸念を口にすると、「ああ」とアーサーも、今度は冷静な口調で同意した。
「ロジャー・ステイプルトンーーバスカヴィルの現当主は、恐れているんだ。革命が起き、民主主義国家となった一族の故郷で、自らの素性が明らかになることを」

＊

コナンとアーサーが大学をあとにしてベーカー街に戻ると、下宿先には思わぬ訪問客が二人の帰宅を待っていた。
昨日会ったローラの姉、ベリル・ステイプルトンだ。
「もう二時間もお待たせしてたのよ。なるべく早く会って、お話したいからって」
二人が留守の間相手をしていたターナが、戸惑いながら言った。コナンとアーサーは顔を見合わせつつ、階段を上がり、リビングに入る。

椅子に座っていたベリルは、二人を見るなり立ち上がり、スカートの裾をつまんで頭を下げた。

「昨日は大変失礼な態度を取ってしまい、申し訳ありませんでした。妹の前では詳しい話はしたくなかったのです。

ですが、お二人の評判は、私も耳にしております。改めて、ご相談させてもらってもよろしいでしょうか、ホームズ様、ワトソン様？」

昨日の拒絶的な態度とは一変して、ベリルは深刻な、またどこか思い詰めたような眼差しでコナンたちを見つめた。「ああ、ええと……」と戸惑うコナンを余所に、アーサーは平然と頷いて見せる。

「もちろん、よろしいですとも。むしろ、話が早い。お聞かせ下さい、ミス・ベリル・ステイプルトン。それとも、ベリル・バスカヴィルとお呼びした方がよろしいですか？」

アーサーの台詞に、サッとベリルの顔色が変わる。

血の気が引いた面持ちで、しかし健気にも、それ以上の動揺は見せなかった。

「……評判通りの方ですのね。ええ、仰る通りです。私の本当の名前は、ベリル・バスカヴィル。神聖ブリタニア帝国の貴族……そして、元イギリス貴族の末裔です。ですが……」

「ご心配なく。ご事情は心得ていますし、このことを公言するような真似はしません。まずはお座り下さい。間もなくターナさんが新しい紅茶を持って来てくれる。ゆっくりとお話しましょう」

その言葉通り、数分後にはターナが淹れ立ての紅茶を持って来てくれた。コナンが受け取り、ターナが退室あと、自分とアーサー、そしてベリルに紅茶を配る。

暖かな紅茶に口を付けると、少し落ち着いたらしい。ひと息吐いたベリルは、表情を引き締めて話始めた。

「ホームズ様が仰った通り、私どもは元はここイギリスのーーそしていまは神聖ブリタニア帝国の貴族、バスカヴィル一族です。とはいえ、ブリタニアではもう貴族としての地位など、剥奪されているかもしれません。私どもはあちらでの政治闘争に負けて、命からがらロンドンに逃げ延びてきたのですから」

「身分を隠して、ですね？」

「はい。イギリス（こちら）では貴族と知られれば、どのような扱いを受けるかわからないと、少なくとも父はーーロジャー・ステイプルトンはそう思っていました。ですから、可能な限り目立たぬよう、ひっそりと暮らしていたのですが……強いられる隠遁生活に、父は忸怩たる想いがあったようでした。事あるごとに、現状は我々に相応しくないと憤って……」

「貴方はどうなんですか、ミス・ベリル・バスカヴィル？」

「どうか、ステイプルトンと。バスカヴィルの名は捨てました。それでいいと思っています。幸い、家族三人、それに以前から尽くしてくれていた使用人たちは、当面賄える程度の財産は残りました。私は十分だと考えています。むしろ……いつ足下をすくわれるかも知れない、ブリタニアでの息苦しい生活になど、戻りたいとは思いません」

そのベリルの台詞に、嘘は感じられなかった。

神聖ブリタニア帝国は厳格な身分制があると同時に、露骨なまでの実力主義社会でもあると言う。野心に燃える者にとっては望ましい環境かもしれないが、万人が心安らかな生活を送れる場所ではないのだろう。

「ご当主は現状に不満を抱きつつ、受け容れてはいらしたのですね？」

「はい。ただ……」

「ただ？」

「……ロンドンに移ってから、父はずっと鬱々としていました。それが、あるときを境に、妙に明るく振る舞うようになったのです。また、これはしばらくしてから気が付いたことですが、深夜に独りで、誰にも告げないまま外出するようになりました。私も使用人たちも、それが気晴らしになるならと見て見ぬを振りをしていたのですが、翌朝になっても帰らないことが増え、それが二日三日と延びていって、とうとう今回は……」

「帰らなくなった、と？」

「はい……」

ベリルの声が沈む。それから彼女は微かに肩を振るわせ、何かを決意するように、一度目を閉じ、開けた。

「それに、他にも気になることがあるのです」

「と言うと？」

「父のコートや手袋なのですが……外出から帰ったあと、妙に汚れていることが多くて。それも、すり切れていたり穴が開いていたり、油の染みや焼け焦げたあとが付いていたり。他にも、あれは……」

「……血のような跡？」

「はい……はい、そうです。詳しくありませんし、使用人も気のせいだと慰めてくれましたが、あれは血痕だと思います」

青ざめるベリルは、アーサーの推測に深く頷きながら、きゅっと唇を噛み締めた。

「父は何か、良からぬことに巻き込まれていたのかもしれません。あるいは……父がそうしたことに、手を染めていたのか……」

そう打ち明けるベリルの姿は痛々しかった。

不意に、コナンは自分が独りになったときのことを思い出した。
あのときコナンは十八だった。ベリルより二つも上だが、親代わりの兄が死に、突然独りで世の中に投げ出された不安は、いまも夢に見るほどだ。
状況を聞く限り、ベリルには使用人以外、頼れる大人もいないはずだ。ましてや、父親が不在のいま、一家の長は彼女である。馴染みの薄い土地で十六の少女が負うには、重すぎる責任だろう。
コナンはそれ以上、黙っていられなかった。
「お父上の行き先ですが、何か心当たりはないのですか？」
「ありません。祖父が存命のころはロンドン（こちら）の知人や元部下と連絡を取っていたようですが、父の代になってから、それも途切れました。いまの屋敷を手に入れた際に一度やり取りがあったぐらいで」
「では、お父上が夜間お忍びで外出されていた目的などは？」
「それも皆目……いま言いました通り、父には友人はおろか、知り合いもほとんどいないはずです。お酒は飲みませんし、その、女遊びのようなことも、私や使用人たちが知る限りでは……」
ベリルの返答に、「そうですか」とコナン。彼女の台詞はどこか事務的だった。妹は父親を無邪気に慕っていたようだが、どうも、姉と父親の関係はあまり良好ではなかったのかもしれない。
すると、
「ご当主が明るく不舞うようになったと仰いましたが、何かきっかけになるようなことはあったのですか？」
アーサーが質問した。
ベリルは「いいえ」と答える。
「特に何もなかったように存じます。いつもと変わらぬ……あ、いえ。そう言えば……」
「何か？」
「は、はい。関係があるかどうかはわかりませんが、父が明るくなったころ、珍しく屋敷に来客があったはずです」
「客が？　お父上は屋敷に上げたのですか？」
「はい。……ああそうだ。そのときも、確か少し揉めたのです。父は最初、追い返そうとしたみたいで。ですが、結局応接室に通して、それどころか、最後は地下の物置にまで案内していました」
「地下の物置？」

「はい。そちらにはブリタニアから持ち帰った物が幾つかしまってありまして……ですから、てっきり私はその方は商人で、家の物を買い取って頂く話が付いたのだろうと」
「どんな人物だった覚えていますか？」
「私は挨拶していないので、顔も見ていません。ですが、そのとき対応した使用人に聞けば覚えているかもしれません。何しろ、ロンドンに移ってから、訪問客はその方ぐらいでしたから。ただ……。若い男性でした。それに、男性にしては髪を長くしてらっしゃいましたわ。ブリタニアではよく見ましたが、こちらでは珍しくて。だから印象に残ってるんです」
「……ご当主の態度に変化があったのは、その客人が訪れたあとですか？　それとも、前？」
「そうですね……明るくなったのがいつからか正確には覚えていませんが、少なくとも、その方が訪れて対応したときは、いつもの不機嫌な父でしたから、あとだったように思います」
「その後、客人が屋敷を訪問したことは？　もしくは、手紙や電報でのやり取りはありましたか？」
「ないーーと思います。とにかく外とのやり取りがない生活ですから、あれば覚えているはずです」
「ふむ……ご当主の変化ですが、他にも何か、以前と違うことはありませんでしたか？　些細なことで構いませんから、思いつくことがあったら仰って下さい」
「そう……ですね。父は、明るく振る舞うようになった反面、突然癇癪を起こすことも増えました。感情の起伏が激しくなってしまって、それを制御できない様子で……」
「なるほど。他には？　特に、生活習慣の変化ですとか、行動面で」
「変化……そう言えば、以前からよく地下の物置には行っていたのですが、その回数や滞在する時間がずいぶん長くなりました。時には一日中物置で過ごすことも」
「ふむ」
アーサーは両手の指先を合わせて、口元に寄せた。
そして、
「ちなみにですが、これまでご当主が夜に外出された日付はわかりますか？」
「え？　いえ、すみません。それはさすがに……何度もありましたから」
「では、先ほどの訪問客が訪れた日付は？」
「すみません、それも正確には……ですが、今年に入ってからなのは確かです。一月か二月か……」
「当然、ご当主が外出されるようになったのも、それ以降ですね？」
「ええ。父が夜中に家を空けるようになったのは、春先ぐらいからだったと思います」
「ご当主が家に戻らなくなったのは？」

「五日前からです。その夜に家を出たきり……」
「その日、何かご当主に変わったことは？」
「どうでしょう……そう言えば、あの日の朝も癇癪を起こしていたような気がしますが、特に珍しいことでは。最近では少しでも気に食わないことがあると、すぐに酷い暴言を口にしていましたから」
「結構。それでは最後に、
魔物についてはどうです？　知っていることがあれば、教えていただけませんか？」
アーサーが尋ねると、「魔物ですか」とベリルは戸惑う反応を見せた。
「昨日お聞きされたことですべてです。確かにステイプルトン――バスカヴィル家には、古くから『魔物が出る』という言い伝えがあります。見たという者もいますが、それを明かす物は何も……」
「『古くから』というのは、具体的にいつ頃からかわかりますか？　たとえば、イギリス時代にはもう？」
「あ、いえ。いまいる一番古株の使用人が若い頃に、初めて話題になったそうなので。ですから、ブリタニアに亡命して以降のはずです」
「先代のチャールズ・バスカヴィルのころですね？　ローラ嬢が魔物を見たのは、ご当主が戻らなくなったあとですか？」
「いえ。それより前――先月の頭頃のことだったと思います」
「言い伝えにある魔物の外見に関してですが、ローラ嬢の証言通りですか？」
「はい。というより、ローラはその話を聞いていたから、そのイメージに引っ張られているんだと思います」
「ご当主は魔物のことについて、何か話されたことは？」
「そもそも、私や妹に魔物のことを教えてくれたのは父でした。ブリタニアにいたころですが。ただ、ロンドンに移ってからは、怖がる妹を大丈夫だと宥めたことぐらいでしょうか」
答えながら、ベリルは不審そうな眼差しをアーサーに向ける。
「ホームズ様は、まさか魔物が実在するとお考えなのですか？」
「さて、魔物の定義によりますね。僕の個人的な考えを言わせていただけば、魔物とはつまり『人間』ということになります。が、今回は……」
アーサーは人を食った風に答えると、そのまま唐突に黙り込んだ。
視線がゆるりと宙を漂っている。これは彼が集中している証拠だ。
一方、ベリルは突然の沈黙に耐えられなくなったらしい。
しばらくして、

「……正直に申し上げますと、父のことを警察に届けるかどうかも、ずいぶんと迷っていたのです」
告白めいた台詞だったが、アーサーはちらりと目を向けただけで答えない。仕方なくコナンが口を挟む。
「それはしかし、お父上の命なのでしょう？　身分を知られぬよう隠遁する立場としては、悩まれるのも無理はありません」
コナンがそう慰めると、ベリルはふるふると首を横に振った。
「違うのです。もちろん、父が他の人間と接触するのを極端に嫌っていたという理由もありますが……父が居なくなっても私どもの生活は何も変わりませんし、むしろ……安心できるのです」
「それは……先ほど仰っていた、感情の起伏が激しくなったからですか？　癇癪を起こされると」
驚いた顔でコナンが尋ねると、ベリルは「はい……」と首肯する。
「父は陰鬱とした人でしたし、家のために何かしてくれるということもありませんでした。いまの生活を手配してくれたのも、ほとんどは祖父の代から仕えてれている使用人たちなんです。それでも、悪い人間ではありませんでした。神経質で、少し臆病で、決して祖父のような優秀な人ではなかったと思いますが、嘘のない人でした。私や妹を愛してくれていました。
それが……。
父の態度が変わってからは、なんだか別人のようで……いつ何を言い出すかわかりませんし、現状を無視して貴族のように振る舞うことも増えました。使用人の中には暴力を振るわれた者もいます。そんなこと、これまで一度だってなかったのに……。私たちももう、どう接すればいいのかわからなくなってしまいました」
「……だから、迷われていた、と？」
「はい……非情な娘だと、お笑い下さい」
ベリルは目元を赤くしながらうつむき、椅子の上で縮こまった。
「しかしーー」
アーサーが口を開けた。
コナンが振り向き、ベリルが顔を上げる。
「貴方はこうして僕の元を訪れた。改めて相談したい、と」
「……妹のことがありますから」
「ローラ嬢の？」
「ええ。正直なところ、妹が独りでホームズ様に依頼するなんて思ってもみませんでした。そ

んな行動的な子ではないんです。それだけ父を心配している証拠ですし、何より不安なんだと思います。妹のためにも、このままではいけないと思いました。ですが、警察では、私たちの事情が知られてしまう恐れがあります。ですから、恥を忍んでホームズ様とワトソン様に縋りに参った次第です」

そう言うと、ベリルは居住まいを正す。

その毅然とした横顔は、すでに少女のものではなく、一人のレディーのそれだ。

「どうか父を捜して下さい。どんな結果であれ、私たちはもう一度、父と向き合いたいのです」

＊